
今は亡きドワーフ村の思い出

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は亡きドワーフ村の思い出

【Zコード】

Z0752Z

【作者名】

たすべ

【あらすじ】

死の女神シーレンの復活……崩壊した故郷……故郷へ帰ってきた一人のドワーフ が昔を思い出す……

自サイトより転載。MMORPG「リネージュ2」を元に独自
設定テンコ盛り注意。

第一話 帰郷

ここは異世界。エルモア大陸という巨大な大陸。

そのエルモア地方遙か北。四方に高い山脈に囲まれた外部から遮られているスペイン鉱山地帯がある。

そこには『大地の種族』と呼ばれるドワーフ族がすむ村があつた。常に『強い勢力に味方する』政策をとってきたドワーフは他の種族に嫌われているが、彼らの持つ組織力と経済力が巨大な力を持つていた。ヒューマンが支配した現在においても、しかし、事態は一変したのだった。

シーレンの復活 - - -

過去、ドワーフたちにより討伐され眠りについた『アースワーム・トラスケン』が復活する。シーレンの命を受けたトラスケンはドワーフ村を襲い壊滅されたのだった。

シーレン復活による疫病に打ち勝つことができたドワーフであったが、トラスケンにはかなわない。ドワーフの長老たちは村を捨てることを決める。

そして神聖な力によつて保護を受けていたといわれる『話せる人の島』へ出向き、再起をはかることになった。

ある日、ドワーフが一人、元ドワーフ村へ帰還した。長く旅へ出ていたのだが、ドワーフ村壊滅を聞き、戻ってきたのだった。

「なんてこと……」

建物は全壊状態。しかもトラスケンと戦つたであらう仲間たちの死体が点在している。

時々 ヒラスケンのしきか寝返りが ものすごい音を立てて地面
が揺れる。

「墓も作れる状況じゃないんだね。ごめんね、みんな」
元村の中を歩きながら、そうつぶやき、まだ村にいたころを思い

出しなのたてた

11

わざかな平地で豪快な声が響いた。

日本文庫

「ハアハア……あー、痛かつた……」

槍を持ち、狩りをおこなうが、このドワーフは両手に奇妙な形をし

が武器を装備していた。

たまたま、緑色の巨人（彼女は後で、炎の種族オーケであることを

知った)が露店で売っていた武器。格闘武器と呼ばれるドワーフ村には売つてない武器であった。

「ふう、疲れた」

その場にぺたんと座る。

「さすがに痛いなー。でも、確実にダメージを貰えられるからいいかな」

格闘武器は両手武器のため、盾を持つことが出来ない。相手が攻撃をミスをする以外、確実にダメージを負ってしまつ。オークらしい武器ともいえる。

「相変わらず、殴ってるねー」

知り合このドワーフがやつてきた。こちらは槍を持っており、モンスターをかき集めては一気に倒すといつ、別の意味で豪快な狩りをするドワーフだった。

「まあね。で、今日はどうしたの?」

「ん~。そろそろ、転職時期だと思つて」

「転職?」

「うん。貴女もそろそろ、その時期じゃない? ビツチに進むの?」「う~ん? ? ?」

ドワーフは駆け出しのドワーヴンファイターから、収集系のスカンジナーと製作系のアルティザンに転職が出来る。
「ま、時間はあるし。じつくり決めたほうが良いよ。後戻りは出来ないからね」

転職は一回きつ。そのあとはさらなる上位職への転職以外ない。

「うん。で、キミはもうどっちに進むか決めたの?」

「アルティザンにならつかと思つているよ。制作楽しいし」

「制作かあ」

「うん。でも転職を指導してくれるドワーフって誰だか知らないから、今探してるの」

「とりあえず、旅に出られる年齢になつたらそのまま追いつかれるような感じだつたしねえ」

「あはは……それじゃまたね」
そう言つと彼女は道を走つていった。

座つたまま、彼女は考える。

(転職か…どっちにしようかな……)

(スポイルは楽しいし…クリエイトは…あ、ウッдинアローしか作
つたことないや。)

(うーん。やっぱ、自分は製作系は向いてないのかなー。)
(スポイル、やっぱ、面白こいし。そっちに行くか。)

…意外と単純だった。

ドワーフ村の何処かにスカベンジャーになるための試練を『えて
くれるドワーフがいるらしい』という情報を得る。

(あの人しか居ないみたいね……)

「コレクターピピ。噂ではスカベンジャーを極めるとなれると言つ
『コレクター。真偽は定かではない。

(ま、ただの噂よね。)

「スカベンジャーになりたいですってー?」

ピピに聞くと驚かれた。しかも呼ばれるとこ。

「あの、そんなに呼ばなくとも……」

「それはそれは感心な事なのです！ 貴女の様に賢い方が少なくなつて、近頃では本当に珍しいのです」

「えと、私、賢くないし……」

「アルティザンになれば、一生人の下で死ぬほど働かされるんです。重い財布を拝む事は出来ませんよ～」

（それはそのドワーフのやり方に問題があるんじゃ……？ とりあえず、聞いている振りをして試練の情報を得ないと……）

アルティザンの悪口？ や自慢話を散々言い続けるピピ。聞いている振りをしているとはいって、聞いているのが辛くなつてくる。

（まだかな～）

終わらない。

（ねえ、もう、ゴールしてもいいよね？）

変な電波拾つたり。

（……）

話し続ける事、数時間後……

「では、お話しましよう～」

（ふう、やつと本題だよ。自慢話は聞き飽きたよ。）
心なしかげつそりした表情。「『愁傷様』という感じで避けて通行していく仲間たち。
それをしり目に気持ちを入れ替えたのだが……

「実は試練について何も知らないんですね、てへっ」

ぶち。

キレた。

あれだけ自慢話を聞かされた挙句、知らぬとは。

彼女は、怖い笑顔を浮かべながら、両手に武器をセット。殴りかかろうと構えた。

「サア、シノウカ?」

「ちょ、ちょっと待つてくださいーーー。」

慌てるピピ。

「ナニカナ?」

「スカベンジャーは、マスタートーマだけが承認する事が出来るのです」

「マスタートーンマ?」

初めて聞く名前だつた。少なくともこの村にはない。

「マスタートーマです」

名前の訂正をしてくるピピ。

「トーマの行方は彼の妹であるミオンが知っています。聞いてみて下さい。紹介状を渡しますから、おひついてください」

「はあ。」

ため息をつくと武器を外す。多少顔色の変わつているピピから紹介状をもらつた。

「それでは、頑張つてくださいね~」

「次はないですかね」

「は、はい~」

(しつかし、疲れた…あーあ、口が暮れ始めるよ…朝一で来たつて言つのに…腹減つたな…)

第一話 怒りの鉄槌！？

「今日も元気だ、飯が美味しい！」…………さてミオンに会いに行くか

なので、とりあえず道具屋へ向かつた。

そして道具屋はぐとミランにビビの紹介状を渡す

「兄を探すんですつて！？」

と叫んだ。

(また、叫ぶし……なんか嫌な予感しかしないんですけど……)

(仕事か何かかな?
マスターじゃつて名前だし……)

名前を間違えて覚えたらしい。

少しう前に手に取る。一巻置かなければ作れないから、一巻持つのが莫
しくなつたんですね」

(……遊び人か、浮浪者ですか？)

兄を抱きまくすなり。この間和のさは豈まじか。」

しかたがなく、配達の手伝いを始めた。多少の不安はあつたが、

それを信じるしか今はない。

萬葉集卷之三

(ミオンはまた、兄さんを餌に使い走りをさせてるな……ひひひ……)

(鈍い奴…お前は「ミオン」騙されていいんだ…)

(な・ん・で・す・と・ー・? あのアマ～ーーーーー)

配達する度に頭に血が上っていた彼女だったが、つぶやきを聞いて怒りが頂点に達した。

鈍足なドワーフとは思えない速度で道具屋へ走り出す。そして、道具屋につくと扉を壊さんばかりに開ける。

「キ・サ・マ」

「次はここへお願ひします」

爆発寸前の彼女に対して、次の荷物配達先を指示するミオン。

「キサマシツティタナ」

「どうしたんですか？ うちの店は迅速配達で有名なんですよ？」

私の兄の事を探すことは心配しないでくださいね」

「断る」

「何を言つているんですか？」

「嫌」

ミオンの襟首を掴むと右腕を振り上げる。すでに格闘武器は装着済みだ。

「……知つていたんだろ……最初っから……！」

可愛い顔が鬼の形相に代わっている。

「ひこ」

ミオンはそれを見て短い悲鳴を上げる。

「どこだ？」

「あ、兄は今回村野東の廃墟によつて、ルシアンの業績を褒め称えにドワーフの王国の東の端に行くと言つたそうです。最後に北の海辺から広い海を見学すると言つたそうです。それ以上は知りませーん

ん

「本當か？」

「ほ、本當ですよ～」

「そう……これ……は……お……れ……い……ね……！」

「へ？」

ミオンを殴り飛ばした。

「ギャパアーーー！」

（何でこいつ、ムカつく奴ばかり……）

数時間後。

「うわあ！」

道具屋に入ってきたドワーフが悲鳴を上げた。壁の一部になってしまった、ミオンを見たからだ。

「…………ブツブツ…………ヒィイイ…………」

と、何か呟いていたという。

「さてと、トシマとやらを探さないと……あいつの兄だからムカつく奴なんだろ？ なんかもう疲れてきた。あの娘のアルティザンへの転職もこんなに大変なのかな？」

そう言いつつ、地図を広げる。

「えーと、廃墟って言ったから炭鉱かな？ 炭鉱に海岸に……東の端か。はあ、全部探すしかないのか。とりあえず近い所から当たるか」

炭鉱。今は使われていないが、モンスターが住み着くようになってしまっている。

「さて、トシマは何処じやく

取りつくし捨てられた炭鉱とはいえ、結構広く深い。モンスターの住処にもなっている場所である。

しかし、彼女の実力なら炭鉱内のモンスターは敵ではなく、襲い掛かってくる奴から殴り倒していく。そして…

「む～。やつと、見つけた…………トントンマ…………」

炭鉱の奥、螺旋状になつた箇所がある。その最下層の広くなつた場所に奴はいた。マスタートーマだ。

「あの～」

恐る恐る声をかけた。ミオンの兄であるので、何をしだすかわかつたもんじやなかつた。

「お、どなた？」

(へ…?)

変な喋り方を気にしながらミオンの手紙を渡す。

「ミオンの手紙？ ふむ、スカベンジャーになりたいの？ じゃ、私が言うとおりクエストしなさい。」

(……気持ち悪い喋り方。ヒューマンにそういうのがいるって聞いたことがるけど、ドワーフにもいたんだね。オカマ？とかいうの。でも、やつと試練を受けられる。)

「最近、体が甘い物を要求するんだわ。どう思ひ？？」

「…………」

「友達が言つには鉱山地帯のハンターベア―を捕まえると時々出てくるハニーベー―というヤツがいるんだけどほつぺが落ちるぐらい蜜を持つてゐるって。そのハニーベア―を殴り倒してスワイーパーでなく探して蜂蜜の壺五個だけ持つて来てよ」

ハンターベア―は鉱山地帯の西部にいる。何度も拳で語り合つてるのでよく知つていた。結構強くてやばかったことも何度あった

相手である。

トーマはティアラの図鑑を取り出して彼女に渡した。

「これは…？ クマの図鑑…？ ですか？」

「そうよ。これを持ってないと、いくらハンターべアーを倒してもハニーべアーは現れないわ」

「へ~

「それじゃ、みひしぐね

「はい

(不安な多量にあるけど… ま、やってみますか。)

第二話 マスター・マの依頼

彼女は鉱山地帯の西部にやってきた。

海に近く、少し開けた場所だ。田舎のハンターベアーよこのあたりに生息している。

「そういえば、何体倒せば目的のハーベアーが現れるか聞いてなかつたな。ま、いいか」

武器を『』に持ち替え、遠距離からハンターベアーを狙い撃つ。当たれば一いちに向かつてくるので、接近するギリギリまで『』で攻撃する。そして、格闘武器の射程距離に入つたら持ち替えて殴る。ひたすらこれの繰り返しである。たまに休憩挟むが…

「はあはあ。まだ出んのか。結構倒したと思つたけど……」

休憩中にぶやくが出ないもんは出ないのである。

「……続けるか」

「うおりやあああ！ー！」

殴る。

「てやあああつーーー！」

殴る。

「とりやあああつーーー！」

殴る。

「ていやあああつーーー！」

殴る。

「ちよんわああつーーー！」

殴る。

ひたすら殴りあつ。拳で語り合ひ。

「くつそー！」

今、一体のハンターべアーを殴り倒した。そのとき、魔方陣が現れた。

「へ？」

その魔方陣から毛色の違つたハンターべアーが現れた。

「派手な現れ方を……こいつが、ハニーベアーね」

ハニーベアーにスポイルをかけ、殴り倒す。あまり強くなかった。

「よ、弱い……なんか拍子抜け……おっと、スワイーパーしないと」

スワイーパーをかけると壺で得た。中に蜂蜜が入っているようだ。
「これが一。大体二十五匹ぐらいで出てくるんだね。それならよし。
し。ガンガン殴りますか！ こうなつたら滅ぼしちゃる～」
半分やけくそ気味であった。

「やつと五個そろつた……さて炭鉱へ……つて……はあ、そうか。
あのトンマ探さないと……」

疲れきつてその場にへたり込む。どうやら、必ずスワイーパーで
得られるわけでなく、結果一百匹近いハンターべアーを倒していた。
「炭鉱と海岸と東の端だったかな……？」

地図を広げ、今いる位置を確認する。一番近いのはもちろん海岸。
海沿いを走つてみることにした。
しばらく、走つてみると海岸の岩山の上に人影を発見。マスタート
ーマだ。

(よかつた) 近くにいて、つとつと、じいじいはなんか出鱈
日に強いトカゲが何匹かいるから気を付けないと…)

出鱈日に強いトカゲこと、クルーデルリザードマン。今の自分が
十人ぐらいないと倒せないと思われる強敵だ。もちろん彼女は戦
つたことはない。

その日を盗んでトーマのいる岩山へ近寄る。そして声をかけた。

「マスター・トンマ～」

「ん? 何かしら?」「

「依頼の蜜持つてきました」

そう言つてそして壺を渡した。

マスター・トーマは受け取り確認するときなり食べ始める。

「あや～ほんとにおいしい～」

無我夢中になっていた。

「あ、あのー」

「あ、あら。ごめんなさいね。美味しくて夢中になっちゃつたわ。
で、次は怪物狩りだわ。タランチュラを捕まえて奴らが抱いている
玉持つてきて。」

「玉?」

「そそ。ハンタータランチュラやプレデター・タランチュラが持つて
るわ。いっぱい、いっぱい持つて来て。少なくとも一十個はね～
必ず得られるんですか?」

ハニー・ベアーの時には聞き忘れた事項だ。また、一二百匹も倒して
いる余裕はない。

「どうかしら? あ、でもね。スワイーパー忘れないでね」

そう言つて、タランチュラの図鑑を貰う。

「わかりました」

「よろしくね～」

(次の試練ね。転職の試練は一筋縄に行かないわ。でも、壺集めよ
りは楽かな…)

(さてと、狩りますか。)

海岸線にそつて東へ、しばらく進むとハンター・ベアの数が減つていき、タランチュラ類が増えしていく。そして、ハンタータランチュラ、フレデタータランチュラがうようよい地帯。勝手に歩き回つていて見えるが、仲間意識が強い。一体が殴られているとすぐ集まつてくる。彼女は、出来るだけ仲間から離れているタランチュラを探して狩ることにした。

「必ず得られるわけじゃないんだ……」
ハンター・ベアと同じような狩り方でタランチュラを狩つている。すでに数十体のタランチュラを狩つて、わずか数個しか得られていなかつたのだ。

「これぞ、試練つて感じよね。」

しばらくして…

「ハアハアハア……何十匹倒せば揃つのよ……」

目の前のフレデタータランチュラを一匹殴り飛ばした。そしてビーズをスワイーパーで得る。

「よっしゃ！ 後一個おー！」

思わずガツッポーズをとる。

「で、次は……あう……固まつてる……」

見回すと結構近い場所に三匹ぐらい寄り合っていた。

そこで、『』で一匹を弱らせて殴り倒し、そのまま次を殴る方向へ進める」とした彼女。

ノングレードソウルショットを装填する。武器に装填することで一時的に破壊力を二倍にしてくれるアイテムである。ただし、一回で効果は切れる。連続装填は可能だ。

三対一の壮絶な戦いが始まった。

「オラオラオラオラオラオラー——！」

格闘武器には常にノングレードソウルショットを装填している。ハンターベアーやたくさん倒すことを想定して、大量に持つてきていた。

『』で弱らせていた一匹を倒した。スワイーパー。出ない。

「次っ！」

一匹目。いつちは最初から殴り合いである。そして、倒す。スワイーパー。出ない。

「出ない！ 次に期待して…ラストオ！」

三匹目。全力全壊で殴る。そして、倒す。スワイーパー。出た。やっと最後のビーズをスワイーパーで得ることができた。

「くは… やつと二十個…… これをトントマに持つて行けばいいのね。」

その場にへたり込む。流石に疲れ切った。

「でも、また探すのか……トントマ…… 明日でいいか、もひとつ…… 疲れたよ、私は……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752z/>

今は亡きドワーフ村の思い出

2011年12月5日21時45分発行